

今更後悔しても追放したのはあなたです

冤罪で離縁された元王太子妃は辺境で溺愛される

マチアス

フェリシアを追放した
クズ王太子。

ジュリー

もう一人の聖女。
マチアスを箝絡し、
フェリシアを追放させた。

フェリシア

聖女の力を持つ元王太子妃。
剣術にも優れ、
並大抵の敵では太刀打ちできない。
過去にパン屋で暮らしていた
経験からパン作りが得意。

クリストフ

辺境伯にして騎士団長。
領地の瘴気を
浄化してくれたフェリシアに、
今まで経験したことのない
感情を抱く。

ペギー

クリストフの信頼する侍女長。
フェリシアを可愛がり、
母のように接する。

ジョイス

クリストフのもとで働く
侍女の一人。
フェリシアをよく
気にかけている。

Main Characters

主な登場人物

目次

プロローグ

聖女がおしとやかだなんて、決めつけないでいただけます？

15

王太子妃なんてお断りします

44

断じて聖女ではありません

72

せっかいですから腕を振るいましょう

120

不穏な足音は自業自得です

207

パン屋を見くびってもらっては困ります

223

プロローグ

キルタンス王国の王宮の東側にある離宮に朝日が差し込んできた、とある日の早朝。

侍女に急かされて支度をした、聖女であり王太子妃のフェリシアは、王宮の中央にある謁見の間で跪いた。

赤いカーペットの先にある数段の階段の向こうの玉座には、ひげをたくわえたキルタンス王国の国王と、その王妃が険しい表情でフェリシアを見下ろしている。

国王の右うしろには、腰に剣を差した近衛騎士団長と、眼鏡をかけた神経質そうな宰相が控えており、物々しい雰囲気だ。

「よくも我が国に危害を与えてくれたな。お前には王太子妃の資格などない」

国王の低い声が、広い謁見の間に響き渡る。

「離婚だ。悪徳聖女」

国王に続き、こめかみの血管が切れそうなほど興奮しながら叫ぶのは、侍従たちを従えて階段下に控えていた、王太子のマチアス・ピエール・アモンだ。数秒前までフェリシアの夫であった男だが、その声には嫌悪が漂っている。



父とはいえ、この国でもっとも尊ばれる国王陛下の発言に口を挟むのは失礼だと思うのだけれど……

近くにいる侍従が誰ひとりとして止めないのが、この国の残念なところだ。

独裁政治を貫く国王に誰も物申すことができず、やりたい放題。それを見て育ったマチアスも無作法で好き勝手に振る舞うことから、高位の貴族の中には品がないとあざ笑っている者もいるのに気づいていない。

国の頂点に立つ高貴な人たちには、もっと気高い存在^{けだか}でいてほしいのだが……

感情をむき出しにして鼻息荒く憤るマチアスの隣では、もうひとりの聖女ジュリー・カミュが、勝ち誇ったような顔をしてフェリシアを見ていた。

彼女が纏^{まと}う、豊かな胸を強調するような首元が大きく開いたドレスは、緊迫感漂うこの場にふさわしいとはどうしても思えない。しかもっとふさわしくないのは、ジュリーに骨抜きにされている締めまりのない顔をしたマチアスだ。

フェリシアは視線を床に落とし、神妙な面持ちでマチアスの離婚宣言に耳を傾ける。

「お前には、国外追放を言い渡す」

この国でもっとも権力のある国王陛下からの追放宣言に、フェリシアは眉をひそめた。

——だめよ、私、もう少し我慢しなさい。

じわりと視界がにじんできてしまい、必死に歯を食いしる。

「フェリシア、なにか言うことはないのか？」

マチアスが威圧的な口調で聞いてくる。

「なにもございせん」

うつすらと涙を浮かべながら正直に答えると、マチアスは驚いたように目を丸くした。しかし次の瞬間、彼の顔が怒りで真っ赤に染まる。

「今さらしおらしく泣いたって遅いんだよ。とつとと失せろ！」

とても王太子とは思えぬ冷酷で汚い言葉が耳に届き、フェリシアは一礼してから出口に向かう。謁見の間から出て背後で重い扉が閉まった瞬間、頬に涙が伝った。

——これでもようやく自由になれる。あのポンコツ、『なにか言うことはないのか？』って……私が『捨てないで』と縋るとでも思ったのかしら？ でも泣いてしまったわ。あまりにうれしくて。

フェリシアは小躍りしたい気持ちを必死に抑え、あちこちにいるメイドたちにあやしまれないよう表情を引き締めてから、これまで暮らしてきた離宮に向かった。

大きめのトランクに、身の回りのものを詰めに詰める。

動きにくいほどのフリルがついた長いドレスを脱ぎ捨て、ここに来たときに身に着けていたくるぶし丈のスカートに着替えて部屋を出た。

すると、マチアスに便乗してフェリシアをなじってきた侍女やメイドたちがにやにや笑いながら見ている。

「とうとう追い出されるんですね」

三十二歳の侍女長が、目を細めてうれしそうに鼻を膨らませた。

——その顔、とびきり不細工よ？

フェリシアはそう言いたいのを必死にこらえる。

彼女たちは、ただの町娘だったフェリシアを最初からバカにしている。一方、フェリシアとマチアスの結婚後に王宮にやってきたジュリーは伯爵家の令嬢で、彼女に媚びるようになった。

王太子妃であり、聖女としての強い能力を持つフェリシアと、伯爵家令嬢ではあるが聖女としての力は弱いジュリー。どちらにつけば有利なのかなんて考えなくてもわかるのに、彼女たちは出づきのみに注目して、判断を誤った。

ジュリーとともに散々嫌がらせをしてくれたのだ。

ドレスを切り裂いたり、食事をわざと落としたり……。彼女たちは満足そうににやにやしていたが、心底バカらしいと思っていたフェリシアは、一切相手にしなかった。

ドレスは王太子妃を広告塔にしたい洋品店がいくらでも持つてくるし、食事は厨房で仲良くなったコックからまかない飯をもらっていたため、空腹だったことは一度もない。

庶民として生きてきた人間の底力を舐められては困る。

とはいえ、フェリシアはこうして追放されるのだから、ジュリーに肩入れしたのはあながち間違っていないかもしれない。

ただし、この先後悔することになる気はするが。

「ええ。今日は最高の……なんでもないわ」

ここを出ていくことを待ち望んでいたと知られては、性格の曲がったマチアスに止められそうだ。フェリシアは深刻そうな顔を作って口を開く。

「残念だわ。でもあなた、盗んだ宝石は返したほうがよろしくてよ？」

平然と切り込むと、侍女長は顔を引きつらせている。彼女は掃除の際、フェリシアの宝石箱からいくつかのアクセサリーを盗んだのだ。

気づいていない振りをしていただけで、指輪三つにネックレスとイヤリングをふたつずつ。あとはブローチひとつが彼女の手に渡ったはず。それらはフェリシアが聖女としての大仕事を果たすたびに褒美として与えられたものだった。

「本物だといいわね」

「はっ……？」

フェリシアが大粒のサファイアの指輪が収まった左手を見せると、侍女長は目を見開いている。

実は彼女に盗み癖があると見抜いていたフェリシアは、ダミーを作り宝石箱に忍ばせておいたのだ。彼女がサファイアだと勘違いして盗っていたのは、残念だけどただのガラス玉だ。

「それじゃあ、元気でね。泥棒さん」

フェリシアはにっこり笑って離宮をあとにした。

唯一の息抜きの場所だった花が咲き誇る広い庭を通り門まで行くと、ジュリーが姿を現し、くせのある長い赤毛の髪をかき上げて横目で見てくる。

『その仕草、品がないわよ』と口から出かかったものの、彼女が人からどう思われようが関係ない

ので黙っておいた。

「もうすぐ頂点に駆け上がれるところだったのに、無様ね」

ジュリーは鼻で笑っているが、あの最低男が本当に欲しいのだろうか。

フェリシアが「悪徳聖女」と罵られて王室から追放されるのは、自分がマチアスの妻——いや、王太子妃に収まりたい彼女の陰謀のせい。フェリシアは罪を被せられたのだ。

その悪事を暴こうと思えばできなくもないけれど、出ていきたいばかりのフェリシアは、あえて沈黙を貫いている。

キルタンス王国では、人間を死に至らしめたり、植物を枯らしたりする「瘴気^{しやうき}」を抑えられる聖女が活躍してきた。

ところが、聖女はどこにでもいるわけではなく、時折その力を持って生まれてくるフェリシアのような特別な人間がいる。そのため尊ばれる存在として代々王族と婚姻を交わし、妃の座に収まることになっている。

現国王の妃も聖女だったが、瘴気を浄化する聖女としての力が弱く、みずから瘴気に侵されてしまい、七年前に命を落とした。

現在の王妃はいわゆる後妻で、聖女の力を有していない。そのため、瘴気を排除できず国が荒れてしまった。

王室が躍起になって聖女探しを始めた頃、フェリシアに聖女の力があることがバレて、なかば無理やりマチアスの妻にされてしまったのだ。

フェリシアが意に染まない婚姻をして半年。『国のために働きたい』ともっともらしいことを言いながら突然王宮に現れたのが、ジュリーになる。

そんな彼女を見て、どうしてあと半年早く申し出てくれなかったのかと、どれだけ残念に思ったことか。そうすれば、あの脳みそすつからかんのクス……もとい王太子と結婚なんてしなくて済んだはずなのに。

マチアスは胸の大きな女性がお好みだそうで、ジュリーに会った瞬間、恋に落ちたようだ。ジュリーもそのつもりなのだろう。豊富なバストを強調するようなドレスばかり着ているので、ある意味お似合いのカップルだと思っている。

「それはどうも」

「は？」

フェリシアの適当な返事に間抜けな顔で声を漏らすジュリーも、マチアスと同じく少々考えが足りない。フェリシアが打ちひしがれて泣くところが見たくて、わざわざ見送りに来たのだろう。けれど残念。こうして話していても勝手に頬が緩んでくるくらいには、心が躍っている。

「あつ、これからいろいろ頑張ってくださいね。それでは、私はこれで失礼いたします」

——私を追いついて大丈夫なのかしら？ ジュリーにこの国の瘴気のすべてを浄化する能力があるとは思えないのだけれど……

フェリシアはそんな心の声を封印して、呆然としているジュリーにつこり微笑みかけてから一歩を踏み出した。

聖女がおしとやかだなんて、決めつけないでいただけます？

大きなトランクを抱えたフェリシアは、王宮を中心に広がっている街の中心までやってきた。このあたりは商店が立ち並んでおり、活気がある。

この一帯は、かつては城壁に囲まれていた。けれど、あまりに人口が増えすぎて手狭になったため、現在は取り払われている。王宮の周囲にだけ城壁が残っているが、近年、この周辺で大きな争いが起こったことはなく、警備も比較的緩めだ。

あまりに無防備なため、それなりに備えておくべきではないかとマチアスに訴えたけれど、『そんなことはわかっている！』で終わってしまった。彼はフェリシアに意見されるのが気に入らないのだ。

プライドだけは山のように高くせして能なしの夫から逃れられたフェリシアは、すがすがしい気持ちで街を歩いた。

そのとき突風が吹いてきて、長くて緩いうねりのあるブロンドの髪がふわりと舞い、慌てて押さえる。この艶のある髪はフェリシアの自慢だが、あまり注目を集めたくない。

「さてと。乗合馬車は……」

国外追放となったからには、早速国境を越えたい。

乗合馬車でもつかまえようと案内所で尋ねると、すでに今日の馬車は出てしまっており、次は明日の午前だという。

時間ができてしまったため、明日までに身支度を整えようと、まずは換金所に向かった。ここは価値あるものを金に換えてくれる場所で、景気が悪いと人でごった返す。今日も何人かの先客がいた。

「はい、そこのお嬢ちゃんどうぞ」

丸眼鏡をかけた白髪の男性に呼ばれて、商談ブースに向かう。

これでも一応王太子妃だったのだが、誰も気づかない。

王太子妃といつても国民の前に姿を現すことはほとんどなく、離宮の隣にあった大聖堂で白い特別な衣装を纏い、聖女として祈りをささげる毎日だった。

しかも、貴重な聖女を隣国にさらわれてはまずいからと名前は伏せられ、国王や王妃主催の晩餐会はおろか結婚式のときですら仮面をつけるという、なんとも言えない不遇な扱い。

王室に近い高位貴族ですら、フェリシアの顔を見ても王太子妃だと気づく者はいない。ましてや庶民には、まったくなじみのない存在なのだ。

「売るものなんかあるのかい？」

眼鏡のリムをそっと上げた換金屋は、いぶかしげにフェリシアを見た。若い女が価値あるものを持っているのか？　と言いたいのだろう。

「宝石でもいいのよね」

「ああ、もちろんさ」

それを聞いたフェリシアは、トランクの中から布袋を取り出してテーブルに置く。

「これをお願いできる？　買い叩くなら、よそに行くけど」

今後のためにいくつかの宝石だけ手元に残して、あとはすべて換金するつもりだ。

フェリシアは袋の中から数々の宝石を出しながら、軽く威圧しておいた。若いからと足元を見られたくない。

「これは……。ほほお」

早速サファイアの指輪を手にした換金屋が、感嘆のため息を漏らした。

無理もない。あの侍女長のもとにあるガラス玉とは違い真正正銘の本物で、おそらくこの国にあるサファイアの中でも随一の大きさのものだから。

聖女の働きの褒美として与えられた宝石がすべて最高級品だったのは、プライドだけは高かったマチアスのおかげであり、そこだけは感謝している。

「どうしたんだね、これは」

「そういうことを聞くのは野暮っていうものよ。買い取るの？　買い取らないの？」

元王太子妃だと知られると面倒なことになりそうなので、あえて強気で応じた。

「お嬢ちゃんの言う通りだ。ここはいわくつきの人間のおかげで潤っているんだし」

こうした換金所は、盗品だとわかっていても取引している。そうした不正が野放しにされているのも、王族の能力のなさを露呈しているようで、ため息が漏れそうになる。

そのおかげでごまかせるというのも、皮肉なのだが。

換金屋はその後もうつかの宝石を手にして、ずっと唸りっぱなし。手に負えなくなったのか、別の男まで呼び品定めをしたあと、想像以上の金と換えてくれた。

「ありがとうございました。お嬢さん、またお越しください」

最初の態度とはまるで違い、平身低頭。丁寧に見送られたフェリシアはずっしり重い金貨を持ち、そのまま鍛冶屋^{かじや}に向かう。

女が鍛冶屋^{かじや}に来るのは珍しいようで、ここでも軽くあしらわれそうになった。しかしひるまず、護身用の剣が欲しいと申し出る。すると店主は、ずらりと短剣を並べた。

「うーん、こういうのじゃなくて……それ、そういうしつかりした剣を見せて？」

フェリシアが店主のうしろに飾ってあった大振りの剣を指定すると、眉をひそめている。

「いやあ、お前さんが持つには重くないかい？」

「平気平気。ちよつと持たせて」

ずつと隠してきたが、フェリシアには剣術の心得がある。

騎士学校に通っていた五つ年上の兄を真似て訓練に励んでいたら、兄より上達してしまった。しかしこの国には女性の騎士はおらず、フェリシアをつつましい令嬢に育てたかった母がいい顔をしなかったので、人前で振り回したことはない。

——そういえばあの人、どうしてるかしら？

兄の騎士学校の学友に、とんでもなく凄腕の剣士がいた。兄もそこそこの腕前だったが彼は抜き

んでいて、上級生どころか講師も歯が立たないほどだったとか。将来を有望視されていた彼は遊びに来るととても優しく、剣の扱い方を教えてくれた。

王太子妃になる前は、フェリシア・ルブランと名乗り、王都から馬車で一時間ほどかかるとある街のパン屋で働いていた。

しかし、本当の名をブリジット・ラージュという。実はフェリシアは、名門ラージュ公爵家のひとり娘で、幼い頃はそれなりに裕福な暮らしをしていたのだ。

ただ、両親も兄も、もうこの世にはいない。

とある理由から誰にもそれを明かしておらず、王宮では侍女やメイドたちにも散々^{しつじ}出自をバカにされた。けれど、本当は伯爵家令嬢のジュリーより格上で、階級の優位を自慢する彼女にずっとあきれていたのだ。

——あんなクズ王太子に嫁ぐくらいなら、思う存分暴れておけばよかった。

そんなくだらないことを考えながら、右足を一步引き重心を落として、ずっしりとした質量を感じる剣を構えた。

「あれっ、剣術の心得があるんだね。ちよつと振ってみてくれないかい？」

さすがは専門家。フェリシアの構えだけでそう見抜いた店主は、興味津々^{しんしん}だ。

「いいけど」

フェリシアは遠い昔に何度も練習した基本の型を披露した。

「すごいな。女でここまで振れるとは……。男でもなかなかないよ」

こんなフェリシアを見て、聖女としてしおらしく振る舞っていたと気づく人がいるだろうか。
「そう？ これにするわ」

剣を手に入れたあとは、宿屋探しだ。幸いすぐに見つかり、明日の大移動に備えて早く眠ることにした。

月が雲に隠れた、午前四時。

宿屋の二階の一室で眠っていたフェリシアは、かすかな足音に気づいて目を覚ました。

「ふたり？ 三人か……。面倒くさいな」

フェリシアは音を立てずにベッドから抜け出し、買ったばかりの剣を手には握り、横に立つ。

予想通りの展開になりあきれているが、売られたけんかは買うでしょ、当然。

フェリシアが剣を握る手に力を込めたそのとき、ドアを蹴破った男が三人なだれ込んできて、一直線にベッドに向かい剣を振り下ろす。すると、自分の代わりに置いておいた布団の下に枕の綿が飛び散った。

「残念。あんなおバカさんに魂を売らなきゃ、死ぬこともなかったのにね」

フェリシアがつぶやくと、男たちが一斉に振り返る。しかし次の瞬間には、フェリシアの剣がビュッと鋭い音を立て、全員絶命していた。

小娘ひとりならと安易に暗殺を請け負ったのが運の尽き。あっさり命を落とすことになってしまったが、同情などしない。剣の心得がなければ、フェリシアは今頃死んでいたのだから。

「殺し屋の雇い主を聞くの忘れた……」

フェリシアを殺しに来たこの男たちは、誰かに指示されてここに来たはず。とはいえ、聞かなくてもわかる。間違いなくジュリーの差し金だ。

フェリシアが国外追放になったのは、彼女がとあることを画策したせい。しかし、それをほかの人間に知られれば、ジュリーの立場が危うくなる。彼女の代わりに罪を被ったフェリシアの口封じをしなければと考えたのだろう。

「また罪を重ねて……。どこまでおバカさんなのかしら」

フェリシアはそうつぶやきながら、血潮の飛んだシャツで剣の血を拭い、鞆に納めた。

「あ……あつ……」

騒動を聞いて駆けつけた恰幅のいい宿主が、腰を抜かして目をひん剥いている。

「ごめんなさい。襲われたから殺っちゃいました」

「は？」

どうやら顎まで外れたようだ。無理もないが。

至極冷静だったフェリシアだが、ふと頭に目の血走った大男の顔がよぎり、鼓動が速くなり苦しくなる。

——大丈夫。あの男じゃないわ。

自分にそう言い聞かせると、ようやく呼吸が戻った。

大立ち回りをしてしまったため当然警察隊がやってきたけれど、捕まるわけにはいかず宿屋から

姿を消した。

そもそもフェリシアが被害者なのだ。ちよつとばかり強いだけの。

「もー、ゆつくり寝させてよ」

裏路地に放置してある荷の間に隠れて身をひそめていたフェリシアは、白み始めた東の空を見上げて悪態をつく。

その後は活動を始めた街の人たちに紛れて、乗合馬車の発車時間を待った。

「ちよつと、あんた」

背後から突然声をかけられ、ビクツとする。警察隊だと思って逃げようとしたが、そこにいたのは鍛冶屋かじやの店主だった。

「あ……」

「隠れてるんだろ？　うちにおいでよ」

まさか、かくまってくれるのだろうか。いや、警察隊とグルかもしれない。

「遠慮します」

「あんたに渡したい剣があるんだ」

「剣？」

不思議なことを言われて、素直についていくことにした。

鍛冶屋かじやに入ると、彼はうしろ手にドアを閉めて鍵をかける。

「安心しな。俺は宿屋の主の友達なんだ。あんたが襲われたのは知っている。このあたりは、女を

襲うバカなやつらがごろついているからな。災難だったね」

「まあ……」

そういうならず者ではなく、自分を狙った刺客に襲われたことは隠しておいたほうがよさそうだ。話せば王宮に連れ戻されてしまい、それこそ命がなくなるかもしれない。もう二度と王族にかかわりたくなかった。

「で、昨日の剣の腕前を見た俺としては、細い体のお前さんが男三人をあつさり殺めたのにも納得してる。相当鍛えただろう？」

あの基本の型だけでそう言うのだから、この鍛冶屋かじや、剣術に精通していそうだな。

彼は満足げにそう言いながら、棚の奥から銀色の鞘さやに入った剣を持ってきた。しっかりと両手で抱えられたその剣のポンメル——柄つかの部分には、小さなグリフオンの彫刻が施されている。店主の丁寧な扱いからして、高価なものなのだろう。

「これ、少し重いんだが、持ってみてくれないか？」

なにも考えずに受け取ると、シャープな見た目とは違いずっしりとしていて驚いた。とはいえ、問題なく片手で持てる。

「ちよつと重めね」

「ちよつと？　構えられるかい？」

「もちろん」

フェリシアは昨日と同じように基本の型をやってみせた。すると、それを見た店主は目を見開き

ながら拍手をしてくれた。

「この剣を振り回せたのは、あんたが初めてだよ」

「は？」

「重いだろ？」

「まあ……」

昨日購入した剣に比べたら重いけれど、振り回せないとはいいたい……。店主が両手で抱えていたのは、高級品だからではなく重かったからなのだろうか。

それなりに鍛えているので、その辺の男よりは力があると自負している。ただ、ほかに振り回せる者がいないほど重くはないと思うのだけれど……

「実はこの剣、貴族軍人が使っていたかなりいいものらしいんだけど、重いだろ？ 使いこなせる人がいなくて」

「そう……」

この鍛冶屋を訪れる剣の使い手は、素人が多いのかもしれない。

「使われている金属が特殊なものようだ。岩を叩き切っても刃こぼれしないとか」

「それはすごい……」

フェリシアは鈍く光る剣先を見ながら感嘆のため息を漏らす。

「よかつたら、持ってかないか？」

意外なひと言に首を傾げる。

「私が？」

「そう。こんなすごい剣、使ってこそだ。でも、肝心の使い手がいなくてね。皆、振ると上体がぶれて使いこなせないんだ。その点、あんたなら大丈夫そうだし。まさかこれを女に薦めるときが来るとは思ってたけど」

たしかに剣というものは、うまく扱えなければいくら破壊力があっても隙だらけになる。

「いいの？」

「ああ、持てきな。一度近衛兵に薦めたことがあるんだけど、それでも無理だったんだよ。この先、あんた以上の人に出会えるとは思えない」

「近衛兵も無理だったの？」

近衛兵であれば、それなりに鍛えているはずだ。フェリシアは驚き、尋ねる。

「そう。だから、もう扱える人間はいないと思っていたよ」

「へえ……」

その近衛兵は本物なのだろうか。近衛兵を装った素人か、あるいは騎士団に入団したばかりで、まだ力のない兵士なのでは？

とはいえ、そんなすごい剣をくれると言っているのに、断る理由がない。

フェリシアは、まだ売っていないかったブローチと引き換えに、剣を手にした。

鍛冶屋の店主はいい人で、この街を出るにしても警察隊の目があるからと、国境近くまで行く知り合いの荷馬車にこっそり乗せてくれた。

荷に挟まれての道中は少々乗り心地が悪いが、文句は言えない。

無事に街を出たところで、幌からこっそり外を覗いてみた。

「あっ……」

フェリシアの目に飛び込んできたのは、幼い頃に家族を失ってからしばらく過ごした修道院だった。いつか恩返しをしたかったけれど、国を追い出された身ではそれも叶いそうにない。

人生は波乱万丈だ。明日はどうなるかなんて誰にもわからないのだから。

辺境の地まで四日。

荷馬車を降りたフェリシアは、うーんと大きく伸びをした。

国境の高い山脈が間近に見えて空気がおいしく感じられることは、自然豊か……と言いたいくところだけれど、付近の草木が枯れている。

どこまでも続く広大な畑が広がっているものの、野菜はまったく育っていない。近づいていくと、育っていないのではなく枯れてしまったのだとわかった。

「どうしたんだろう、これ。仕事を放棄した？」

キルタンス王国の税は高く、地方の農村は支払いに悲鳴をあげているそうだ。働いても働いても暮らしが向上せず、絶望のあまり仕事を放り出してしまったのだろうか。

王宮はあんなにきらびやかで、毎日のように厚いステーキとふんだんな野菜や果物が出てくるのに、作物を育てている人たち自身が食えないなんて、完全に政策の失敗だろう。

比較的裕福な王都にいても、国王の統治がうまくいっているとは思えなかったが、辺境の地は想像以上だった。

荷馬車のおじさんに聞いたところでは、この一帯はチエルダムと呼ばれる領地らしい。一本道を少し歩いていくと、このあたりでもっとも大きな街に入るのだとか。

空腹を覚えたフェリシアは、食べ物調達するために街に行ってみることにした。

商店らしき建物が並ぶ広場に到着したものの、どこもかしこも閉まっており、あたりは閑散としている。

「一番大きな街って言ってたよね……」

王室に入る前にフェリシアが暮らしていた街は、さほど大きくはなかったものの、もっと活気があった。ただ、国境近くまで来たのは初めてなので、こんなものなのだろうかとも思う。

しかし、昔見た光景を思い出して背筋が凍った。

「まさか……」

先ほどの畑は、瘴気のせいで荒れたのかもしれない。だとしたら、人々も病に侵されている可能性がある。

フェリシアは走りだした。一刻も早く原因を見つけなければ。

「井戸はどこ？」

フェリシアが聖女であると周囲に知られたのは、以前住んでいた街の井戸水が瘴気に侵され、それを浄化したからだ。

そのときと同じことが起こっているのではないかと考えた。

おそらく、街の人々が共同で使う井戸があるはず。それを見つけないのに、人影がなくて聞くこともできない。

さらに進んでいくと、二階建てのレンガ造りの住居がずらりと並んでおり、石畳みの小道が突然開けて別の広場が現れた。

その先に、詰襟の赤の上衣に黒のズボンという軍服姿の兵たちが多数おり、黒色の髪を持つ背の高い男がなにやら指示を出している。

彼だけは黒い上衣に金色のブレードが印象的な肋骨服を着ており、肩章からも位が高いとわかった。

「第一部隊は東側、第二部隊は西の地域だ。被害を把握して、すぐに伝える。第三部隊は瘴気の源を探れ」

「はい」

兵たちのそろった声が聞こえてきて、ピリツと緊張が走る。

やはり、瘴気に侵されているようだ。

「あの……」

フェリシアは思いきって騎士団長らしき男に声をかけた。

「すまないが、今は忙しい。陳情はまたあとで聞く」

フェリシアより、五つ六つ年上だろうか。申し訳なさそうに眉をひそめる彼は、長めの前髪から

覗く切れ長の青い目と通った鼻筋を持つ、凛々しい男性だった。

どこかで会ったことがあるような気がするが、思い出せない。王宮だろうか。

「待ってください。陳情ではないんです。もしかして、瘴気にやられているんですか？」

去っていきそうな男に慌てて尋ねると、彼はうなずいた。

「君は？」

「私は別の街から参りました旅人です」

フェリシアは追放された身であることを隠して、そう答えた。

「そうだ。瘴気にやられている。畑はだめになり、人々は病に苦しんでいる。だが、瘴気の源がわからず……。わかったところで、自然と消えるまで近づかないようにすることくらいしかできないのだが」

彼は悔しそうに唇を噛みしめた。

実はこの瘴気は、なぜ生じるのかよくわかっていない。時折湧いては、人々を困らせる。

次第に濃くなっていくもその後は薄くなっていく、何カ月かしたら消失する。しかし、その間に瘴気の影響を受けた草木や農作物は枯れ、人は健康を蝕まれ……。最悪の場合死に至る。

瘴気の前では屈強な騎士団も歯が立たず、聖女の浄化がそれをすぐに消すことができる唯一の手段なのだ。

そのため、フェリシアが浄化に携わっていた王都周辺の街は平穏だった。その一方、辺境の地がこれほどひどく侵されているとは……

現在キルタンス王国にいる聖女はフェリシアとジュリーのみ。しかもジュリーは目の前の小さな瘴気を消せる程度の力しかなく、フェリシアひとりで王国の隅々まで走り回って浄化するわけにはいかないのが現実だった。

「悪いが、今旅人をもてなす余裕がこの街にはない。君も瘴気に侵される前に、ここを^た発ったほうがいい」

騎士団長はそう告げると、再び歩きだす。

自分ならこの状況から救えるかもしれない。

そう考えたフェリシアは、彼の前に回り込んで口を開いた。

「フェリシア・ルブランと申します。私、お手伝いできます」

「手伝う？」

「はい。瘴気を消せるんです」

フェリシアの発言に、彼は驚いて目を見開く。

「瘴気を？ そのようなことができるはずもない。……いや、もしかして聖女さまなのですか？」

なんとかしなければと勢いで彼を止めたが、瘴気を消せるのは聖女だけだと皆知っている。疑問を持たれるのは当然だ。

聖女だと知られたくない。追放された王太子妃だということも。もうなににも縛られず、自由に生きていきたいのだ。

とはいえ、この瞬間にも誰かの命が尽きるかもしれないのに、見て見ぬ振りはどうしてもできな

かった。

「聖女、ではないのですが……。一度私に試させていただけませんか？ ほかに手立てがないのなら、どうかお願いします」

苦し紛れにそう言うと、騎士団長はいきなりフェリシアの手を握る。

「クリストフ・アンドレ・モントブルーと申します。どうかお願いします。我がチエルダム民のために、力を貸してください。報酬はいくらでも望むままにお支払いしますから」

たわごとなど聞いていられないと切り捨てられるかと思いきや、信じてくれたようだ。

しかもフェリシアを散々こき使い、民などどうでもよく、悠々自適に過ごしていたマチアスとはまるで違う彼の態度に感銘を受ける。

「かしこまりました。瘴気の排除が終わるまで、水を使わないでください。人間にも多くの被害が出ているということは、井戸の水が侵されている可能性が……」

畑だけが被害を受けているのであれば、単に瘴気がその場所で増殖したのだろう。しかし瘴気が原因で、同時に多くの人間が倒れることはまずない。瘴気には流行風邪のように人から人へ伝染する性質はなく、瘴気を間近で浴びた人のみ苦しむはずだからだ。

本来黒い霧^{もろ}として見える瘴気は、水に溶けてしまうと気づきにくくなる。味は変わらないので汚染に気づかず飲んでしまい、同じ井戸を使った住民たちが次々と倒れていく羽目になる。

「井戸……そうか」

フェリシアの言葉を信じてくれたクリストフは、近くにいた兵士に水の使用禁止命令を出し、

人々に伝達するように促した。

あまりに迅速な対応に感心しながら、フェリシアはトランクを置き、背に担いでいた剣も外して、早速瘴気の浄化に取りかかるうとする。

「すぐに井戸にご案内します」

「いえ、ここで大丈夫です。この街全体の瘴気を消します」

こうした広範囲の浄化はとてつもない力が必要なので、まずやらない。しかし、この瞬間にも誰かが命を落とすかもしれないと思ったら、やらないという選択肢はなかった。

「なにか必要なものは？」

「なにもいりません。集中したいので、しばらく話しかけないでください」

ごつごつした石畳の広場に膝をついたフェリシアは、手を胸の前で組み、大きく深呼吸する。そして目を閉じた。

『天に与えられしみなぎる力よ。邪悪な存在を排除し、我らに幸福を』

神経を研ぎ澄まして念じると、体からあふれる力が円を描くように四方八方に広がっていくのを感じる。

この力はどこまでも届くわけではないけれど、フェリシアの能力をもつてすれば、この街ひとつくらいなら造作ぞうさもない。

「クリストフ卿！ 井戸を使用禁止に——」

「静かに」

報告にきた兵士の声で集中力が途切れそうになったが、クリストフが黙らせてくれたため、そのまま続ける。

『人々と大地に命の恵みを』

フェリシアは別の言葉を心の中でつぶやいた。

聖女は……いや、フェリシアは、瘴気に対して“浄化”の力しか持たぬと思われているが、実は違う。汚染された人の体や大地を元通りにする“再生”の力も持っている。

王太子妃として聖女の役割を果たしていたときは、再生の力を一度も使わなかった。というのも、瘴気による汚染がひどくなる前に浄化できたため、あまり必要ではなかったのだ。

聖女としての力が弱いジュリーはこの力を有しておらず、再生については誰も知らないはず。

こうした力があることを知られば、悪用して私利私欲を満たそうと考える邪よこしまな人間が寄ってこないとも限らない。だから本当は隠しておきたかった。

けれど、人々が元氣を取り戻しても畑が壊滅的な被害を受けていては、税を払うどころか食うに困るだろう。瘴気で命を落とさずに済んでも、飢えてしまう。

そう考えて、再生の力を使うことにしたのだ。

ただし、この力を行使するには、強い精神力とさらなる体力が必要になる。

——頑張りなさい、私。

息苦しさを感じたフェリシアは、自分を鼓舞してできるだけ遠くまで力が届くよう全身に力を込めて、ひたすら念じ続ける。

地面についた膝に小石が突き刺さり痛みを感じるものの、やめられない。膝のけがなどすぐに治る。それより、チエルダム为民の命だ。

「……はっ」

「危ない」

力を使い果たしたせいで、その場に突っ伏しそうになったフェリシアを支えてくれたのはクリストフだった。

筋肉質な腕で抱きかかえてくれる彼の青い目に自分の顔が映っていることに気づいて、どきりとした。

「すみません」

離れようとしたものの、力が抜けて立ち上がることもできず、座り込んだまま口を開く。

「もう水を使っても大丈夫です。皆さんの健康も畑の野菜も、もどに戻っていると思います」

「畑まで？」

とにかく安心させなければと思いそう伝えると、クリストフはひどく驚いている。

「辺境伯さま！ つい先ほどまで高熱で唸っていた子供が、突然元氣を取り戻しまして……」

西の方角から兵士が駆けてきた。ひどく慌てている彼は、目の前で再生の力を目撃して驚いたのだろう。

——クリストフさまは、辺境伯だったのね。そのような高貴な身分の人間がみずから先頭に立つて事態の収束を図ろうとするとは、素晴らしい。

マチアスはフェリシアに丸投げして、瘴氣が発生した場所に近づこうとはしなかった。邪魔なので、いないほうが助かったけれど。

「このお方が救ってくださいだったのだ」

「えっ……？」

「か、枯れた小麦が元通りに……」

今度は別の兵士がそう報告してきた。

どうやら浄化も再生も成功したらしい。

「よかった……」

安堵して、声が漏れる。

「先ほど畑とおっしゃいましたが、まさか小麦もあなたが？」

「ええ。お役に立てたなら幸いです」

笑顔で答えるとクリストフは優しい表情でうなずき、首を垂れる。

「なんという力だ……。本当にありがとうございます」

辺境伯であれば、王室主催の晩餐会ばんさんかいにも呼ばれているはず。聖女ではないと苦し紛れの嘘をついたけれど、フェリシアが王太子妃だったことに気づかれてしまうのではないかと心配だった。

しかし、そんな素振りはない。常に仮面をつけていたので顔は割れていないはずだし、辺境の地に王太子妃が来るとは思ってもいないのかもしれない。

冷たい地面に座ったままなのも……と思い立ち上がったけれど、やはり力が入らずよろけてしま

うありさま。すかさず抱きとめてくれるクリストフは、スマートだ。

「すみません。ちょっと頑張りすぎたみたいで……」

長時間剣を振り回せるほど体力には自信があったのに。広範囲にわたる再生は、少しばかりきつかったようだ。

「失礼いたします」

「え……？」

いきなりクリストフに抱き上げられて、目をぱちくりさせる。

「どちらに行かれる予定だったのですか？」

動揺するフェリシアとは対照的に平然としたクリストフは、大きなトランクを見て言った。

「……えーっと、別の国に行こうと思っておりまして」

国外追放になったなんて明かしたらややこしいことになりそうなので、ごまかしておく。するとクリストフの表情が一瞬曇った。

なにかまずいことを言ったのだろうか。

「そうでしたか。今晚の宿はお決まりで？」

「まだなんです。食事をしたくて街に来てみたら、様子がおかしくて……」

そう言ったのと同時に、ググググーウと腹が大きな音を立てたので、顔から火を噴きそうだった。

「す、すみません」

「あはは。体は正直だ。よろしければ我が屋敷にお泊りになりませんか？ 野菜がとれなくて困っ

ておりましたが、元通りにしていただけたならすぐに取り寄せて食事を用意させます。できれば、あなたのお力についてくわしくお聞きしたく……」

クリストフが親切なのは間違いないさそうではあるけれど、おそらくフェリシアの正体を知りたいという気持ちのほうが大きいだろう。瘴気を浄化した見知らぬ旅人が気になるのはあたり前だ。

——宿と食事はありがたいけど、聖女の力について明かしたくないのに……

散々王室に利用されて、挙げ句あつさり追放されたフェリシアにしてみれば、もう余計な厄介ごととに巻き込まれるのはごめんだ。

自分の力が役に立つのであればいくらでも使いたいけれど、都合のいいようにこの力を搾取されるのは避けたかった。

マチアスがそうだったから。彼はフェリシアをこき使い、手柄は自分のものとした。

「いえ、あの……」

断ろうとしたものの、ふらつく体ではまともに宿も探せない。最悪野宿でも……と思ったけれど、今回のことで注目を浴びてしまったため、こっそりと、とはいかなそうだった。

「もしかして、そのお力については明かされたくないのでしょうか？」

なんと察しがいいのだろう。クリストフにずばり問われて、素直にうなずいた。

「興味本位で気軽にお聞きしてしまい、申し訳ございません。もちろん、お話しにならなくても結構です。ですが、私たちの恩人をこのままお見送りするわけにはいかないのです。どうか、ささやかな恩返しをさせてください」

紳士的なクリストフに驚く。

マチアスの妃となつてからフェリシアの周囲にはまともな人間がおらず、親切な言葉をかけられたのも久しぶりだった。

「それでは、お言葉に甘えさせてください。ですが……下ろしていただければ。そろそろ歩けるかと」

周囲の兵士の視線が集まつており、恥ずかしい。

「それはできません。恩返しをさせていただくと申しましたよね」

すぐに了承してもらえらると思つたのに拒否されて、瞬きを繰り返す。整つた顔でじつと見つめられては、鼓動が速まり制御できなくなるのに。

マチアスの妻であつたとはいへ、聖女の力を利用するためだけの白い結婚。そもそも女癖が悪く、胸の大きな女性ばかりを好むマチアスの目には、まな板とまではいかないが小ぶりの胸のフェリシアは映つてもいなかった。

そのため、一度は結婚を経験しているとはいえ男性に免疫がなく、顔が真っ赤になっている自覚があつた。

「馬車を待つよりこのまま歩いていったほうが早い。行きましょう」

「えつ、このまま？」

「はい、このまま。荷は運ばせますので、ご心配なく」

クリストフはにっこり笑う。

「フェリシアさまの荷を運んでくれ」

クリストフが近くにいた兵士に指示を出すと、筋骨隆々の男がトランクを持ち、そのあと剣にも手を伸ばす。

「なんだこれ……」

「どうした？」

兵士の声に反応したクリストフは、尋ねた。

「こちらの剣が、重くて……。そのような細い体でお持ちになられるのですか？」

兵士は剣とフェリシアを交互に見て、目を丸くしている。

「そんなに重くはないかと……」

鍛冶屋の店主も盛んに重いと話したけれど、ほかの剣に比べれば多少……という程度なのに。

——まさか、筋肉ムキムキの兵士より力があるのかしら、私。

兄より剣術を極めてしまつたフェリシアだけれど、さすがに腕力では兄に敵わなかつた。彼は兄より鍛えているように見えるのだけれど……見せかけだけ？

フェリシアが首を傾げていると、もうひとりの兵士も剣を手にはしている。

「本当だ、重い」

鍛冶屋の店主だけならまだしも、何人もがそう言うのだから、やはり重いのもかもしれない。

「お前たち、鍛え方が足りないのでは？ 持てないほどではないのだろう？」

「はい、もちろん」

クリストフの質問に、兵士たちは不思議がりながらも返事をしている。

「とにかく、フェリシアさまの体を休めたい。慎重にお運びしなさい」

「かしこまりました」

追放の身であるというのに、これほど丁寧に扱われて戸惑う。

「やっぱり自分で運びま——」

「申し訳ございませんが、その言葉は聞かなかったことにします。恩人に対して失礼なことをすれば、私の名譽に傷がつきますから」

名譽に傷がつくとは大げさな。

そう思ったけれど、もしかしたらクリストフは、フェリシアが遠慮しないように気を配ってくれているのかも。

「そうですね。本当にすみません」

恥ずかしくてたまらないけれど、これ以上固辞するのも悪いので、素直に従うことにした。すると、クリストフは満足そうにうなずいて足を踏み出した。

広い通りの左右に並ぶ家の二階の窓から多くの人たちが顔を覗かせており、興味津々で見ている。それもそうだろう。フェリシアを抱いたクリストフを先頭に、兵士たちが列をなしているのだからまるで勝利を収めて戦場から戻った騎士団のようだ。

人々を救ったことに間違いはないけれど、まさかこんなことになるとは。

「あの、荷物はお任せするので、せめて自分で歩かせていただけませんか？」

「膝が痛みますよね？」

「あ……」

気づいていたのか。

たしかに小石がいくつも突き刺さった膝が痛い。傷にはなっているかもしれないけれど、歩けないほどでは断じてないのに。

「もうすぐそこですから、どうかこのままで」

「……わかり、ました」

「ひとつ、お聞きしても？」

クリストフはフェリシアを見て、優しく微笑む。

「お答えできることであれば」

聖女であることについては明かしたくないとわかったはず。それ以外なら大丈夫そうだけれど、万が一元王太子妃だと気づかれていたら否定するつもりだ。どうせ今晚だけのお付き合い。余計なことを知る必要はない。

「随分立派な剣ですが、ご自分で扱われるのですか？」

女が大振りの剣を持つことはまずなく、せいぜい鍛冶屋に最初に薦められた護身用の短剣くらいだ。だから不思議に思われてもおかしくない。

「剣術を少々」

「なんと。剣術の心得まであるとは」

興奮したのか、フェリシアを抱くクリストフの手に力がこもり、心臓がドクンと音を立てる。ますます恥ずかしくなり、なんとなく視線をそらした。

この国の騎士団には、けがの治療を請け負う医療班に女性はいるものの、剣士や騎士にはいないと聞いている。この地の騎士団もそうだろう。ちらりと見たところでは、全員男性だし。剣を扱える女性なんて、フェリシアもほかに知らない。

「しゅ、趣味程度ですよ」

襲ってきた刺客の男三人を瞬殺できるくらい能力はあるが、ごまかしておいた。ますますあやしまれてしまう。

「それでもすごい。あの剣はどなたから譲り受けられたのですか？」

「えっ……？」

——譲られたとどうして知っているの？ 剣に興味があるのであれば、買った店を知りたがるのではないの？

「鍛治屋の店主が薦めてくれて……」

正確に言うと、フェリシアの腕を見込んだ店主に託されたのだが、腕が立つことはやっぱり隠しておきたい。

「店主が……。そうでしたか。このような弱い女性に重い剣を……」

あやしまれていると緊張が走ったものの、クリストフはくすくす笑っている。店主の選択がおかしいと思っているようだ。

「そ、そうですよね。でも気に入っているんです」

「それではいつそう大切に運ばなければ。見えてきました。あれが我が屋敷です」

クリストフは、夕日に照らされてほんのりオレンジ色に染まる、二階建ての立派な白亜の建物に視線を送ってそう言った。

王太子妃なんてお断りします

フェリシアが聖女だとわかったのは、この世に生まれ落ちた直後のことだ。

聖女の力を有する者は、体のどこかに聖女の証である紋章が現れる。聖母マリアの象徴ともいわれる百合の紋章が太ももの内側にあるのを見つけたのは、フェリシアを取り上げたラージュ家の侍女だった。

すぐに気づいて報告すると、両親は尊い娘だと大喜びしたという。

しかし同時に、父は苦い顔もした。この国では聖女が王族の妃となるのが慣例となっており、私利私欲を満たすことしか考えていない無能な王室に嫁がなければならないことを危惧したのだ。

そのため父は、この国の民のために瘴気を浄化できる力を使うべきではあるけれど、自分が聖女であることは隠しておきなさいと、フェリシアに強く伝えた。

フェリシア自身も、きらびやかに着飾り、贅沢三昧できるという王室での生活など少しも興味がなく、それより剣術。強い者にあこがれを抱き、みずからも力をつけたいと手に肉刺ができるほど剣を振り、馬を乗りこなすような女の子だった。

そのため、狭い世界に閉じ込められるのはごめんだと、聖女の力はこっそりしか使わなかった。そんなフェリシアがキルタンス王国の王太子妃となったのは、十八歳になったばかりの頃。

聖女の力をひた隠して育ってきた自分には無縁の話だと思っていたのに。

——あの日、までは。

「フェリシア。ケーラおばあちゃんのところにお使いを頼む」

大きな窯の前で汗をかきながらパンを焼いていたフェリシアに声をかけてきたのは、このパン屋の主人で三十五歳のロセターさんだ。

王都から馬車で約一時間。のんびりとした空気が漂うこの街にはおいしい食べ物がたくさんある。そのひとつがここ、ロセター夫妻が経営するパン屋だ。

特に干しぶどうを練り込んだパンが大好評で、これを目当てに遠くから足を運ぶ客までいる。とある子爵家の当主も気に入っているらしく、使用人が毎日のように買いに来る。決まった農家からぶどうを取り寄せて天日干しするところからロセター夫妻の手作りで、貴族の厨房を預かるコックでも同じ味はなかなか出せないのとか。

もちろんフェリアも大好物で、ぶどうの選び方から干し加減まで、教えてもらいながら勉強している最中だ。

ほかには様々な種類のジャムもあり、こちらも大好評。フェリシアも作るのを手伝っている。

「はい。すぐに」

フェリシアは焼きあがった白パンを窯から取り出して、店頭に出ていった。

「白パン、ちょうど焼けましたよ」

「おお、ありがとう。フェリシアが来てくれてから、本当に助かってるよ。おばあちゃんのところ
に届けたら、少し休憩していいから」

「はい、それでは行ってきます」

ロセター夫人が用意してくれた大きなライ麦パンが三つ入った籠かごを持ち、パン屋を飛び出した。
今日は天気がよく、青い空が広がっている。フェリシアは目を細めて空を見上げ、すーっと大き
く息を吸い込んだ。

「春のにおいがする」

花の甘い香りだとか、草の少し青くさいにおいだとか……この時季独特のいい香りが鼻をくす
ぐる。

足を踏み出したそのとき、不意に吹いてきた心地よい風が、ほどよく波打つフェリシアの自慢の
長い髪を揺らした。

艶のあるブロンドの髪は、父譲りだ。ちなみにぼつちりとしたグレーの目は、母にそっくりだと
よく言われた。

寒い冬を乗り越えた人々の表情は明るく、街には活気があふれている。

パンの届け先のケーラおばあちゃんは、昨年 of この時季まではみずからパンを買いに来ていた。
けれど足腰が弱り、最近是这样としてフェリシアが届けに行くことが多い。

おばあちゃんの家には小走りでも十分もあれば到着するのだが、道端の花を眺めながらの道中はよ
い息抜きになるので、この時間はわりと好きだ。

ただ……三日前に通ったときはきれいに咲いていた花壇の花が軒並み枯れていて、首を傾げた。

——天気もよかったのに、なんで急に枯れたんだろう。

雨が降りすぎると根が腐り枯れることはあると聞くが、この三日は一滴も降っていない。
だとしたら、水のやり忘れだろうか。それにしても見事な枯れっぷりで驚くほどだった。

「ケーラおばあちゃん、パン屋です」

おばあちゃんの家をノックしながら声をかけると、しばらくしておばあちゃんが顔を出した。
「まあまあフェリシアは元気だね。いつもありがとう」

杖をついたおばあちゃんは、目尻のしわをいつそう深くして笑う。

「ライ麦パン、硬くない？」

「そうだけど、ねえ……」

おばあちゃんが言葉を濁すのは、小麦粉で作った白パンのほうが少々高いからだ。

キルタンス王国は税が高く、若い頃に懸命に働いても十分なお金は貯まらない。年老いたら切り
詰めた生活になってしまう。

「そうだよね……。今度白パンが余ったら持ってくるね」

「ありがとね。あなたみたいな気立てのいい娘は、そろそろ結婚の声がかかるんじゃないの？」
思わぬことを言われて、きよんとする。

「結婚？ そんなこと考えたこともないよ。生きているだけで精いっぱいもん」

フェリシアはラージュ公爵家の令嬢として生まれたものの、両親や兄を亡くして修道院で数年過

ごした。修道院では貧しい人に配るためのパンを作っており、その焼き方の指導に訪れていたロセター夫妻が、勤勉に働いていたフェリシアを気に入り店に招いてくれた。今はパン屋の二階にあるロセター家の屋根裏が、フェリシアの寝床だ。

パン屋の仕事を得てから、がむしやりに働いてきた。そのおかげでロセター夫妻からは信頼を得て、発酵から焼きの作業までなんでも任せられるようになったし、お客さんからも慕ってもらえる。今の生活が楽しくて、嫁に行くなんて考えたこともない。

「もったいないわね。こんな働き者、滅多にいないのに」

「おばあちゃん、ありがと。でも私、パン屋の仕事に向いてるみたい。生地をこねる時間なんて、最高に楽しいの」

それは嘘ではない。焼き上がりを想像しながら生地をこねる時間は、至福のときだ。小麦粉や酵母の香りが漂ってくるあの厨房は、大好きな場所なのだ。

「そうかい？」

「うんうん。おばあちゃん、体に気をつけてね。ちよつと病気が流行^{はや}ってるみたい」

「そうみたいだね。しばらく家に閉じこもっておくよ。野菜も持ってきてもらえたからね」

「そうして。またパンを持ってくるね」

この街の人たちは心が温かくて、困っている人がいると放っておけない。足腰が弱くなったおばあちゃんのことでも街ぐるみで守っている。

フェリシアはこの街が気に入っていて、ずっとここでパン屋をしていられたら……と考えている

が、どうなることやら。

そこそこ波乱万丈な人生を送っている自覚はあるので、明日がどうなるかなんてわからないと知っている。だから今をいっぱい楽しみたい。

おばあちゃんの家をあとしたフェリシアは、少し寄り道をして休憩することにした。

街の中心は様々な商店が並んでいて、いつもうるさいほどの声が飛びかっている……はずなのに、今日は静かだ。いくつかの商店は閉まっており、フェリシアの大好物で修道院でも育てていたりんごを売っている果物店も同様だった。

「お休みなのか……」

「パン屋さんじゃない。ここに用でも？」

「りんごが欲しくて」

パン屋の常連の女性に声をかけられて答えると、彼女は眉をひそめた。

「それがね、このあたりで急激に伝染病が流行^{はや}りだしたみたいで、多分この店主もやられてしまったのよ。あなたも気をつけなさい」

噂には聞いていたけれど、病が思った以上に蔓延^{まんえん}しているようだ。彼女が口元にハンカチを巻いているのも、感染を防ぐためだろう。

「ありがとうございます。そうします」

「でもねえ、いつもの伝染病とは少し違うみたいなのよ」

「どういふことですか？」

彼女が意味ありげに語るので尋ねた。

「普通はさ、こうやって話したりすると病気が移るじゃない？ でも、それがまったくなくて皆が口をそろえるの。一応ハンカチで予防はしてるけど、あんまり意味がないのかも」

「それじゃあ、どうやって移るんでしょう？」

街に広がっているのであれば、伝染するなんらかの理由があるはずだ。

「それがわかればね……。ただ、その家でひとりでも患者が出ると、家族ごと全滅するみたい。まあ、ほかの伝染病でもそうなんだけど、ひとりくらいは移らずに済む人がいたりするでしょ？ でも今回は違うの。本当に全滅。それも全員同時期に。吐き気と熱でつらいんだって。パン屋さんが閉じると困るから、気をつけて」

「はい」

といっても、原因がわからないのではどうしようもない。

女性と別れたフェリシアは、閑散とした商店街を尻目に、店に戻ることにした。

「家族ごと全滅って……」

以前、ロセター夫妻がひどい熱で店を休んだときも、別の部屋で寝起きしていたフェリシアだけは病にかからずに済んだ。

どの家庭も、もれなく全員、しかも順番に伝染していくのではなく同時期に倒れるのは少々不思議だ。

「ただいま戻りました」

店の裏口から帰ると、ロセター夫人が驚いた顔をしている。

「休憩してくればよかったのに」

先ほど聞いた話を伝えと、苦々しい顔をしている。

「うちも時間の問題かしら。怖いわね。でも、店を閉めると困る人がたくさんいるし……」

このあたりでパン屋はここだけだ。ここを閉めてしまうと、歩いて三十分ほどかかるところにかパン屋はない。

「そうですね。気をつけます。あつ、そろそろ水がなくなりますね。井戸に行ってきます」

「助かる。よろしくね」

三、四日に一度補充する、厨房の片隅にある大きな水甕すゐがめの水が尽きかけているのを見つけ、再び店を飛び出した。

街の人なら誰でも使える井戸は、店から歩いて五分。小さめの甕かめをいくつか載せた手押し車を引いて向かう。重い水を運ぶのは重労働だ。

近づいていくと、井戸の向こう側に男性が倒れていることに気がついて駆け寄った。傍らに桶が転がっている。

「大丈夫ですか？ どうしたんですか？」

真っ青な顔をした男性は、苦しげに呼吸を荒くしてかすかに口を動かし始める。

「ちか……づくな」